

「AとBどちらがいい？」

と聞かれたとき、私の返事はいつもどっちでもいいの一択。もし被ってしまったときに争いたくないという理由でその選択から逃げてきた。「自分らしさ」って何だろう。自分の思いがあることなのか。自分を優先することなのか。私はずっとわからなかった。

私が読んだ本は、「世界から猫が消えたなら」という本だ。がんで医者に余命わずかと告げられた主人公の前に自分と同じ姿をした悪魔が現れる。その悪魔から

「この世界から何か一つを消す代わりにあなたは一日の命を得ることができます。」

と取引をもちかけられる。その取引にのった主人公は電話、映画、時計と次々に消していくが、だんだん消していくのが嫌になり、大切なものに気づかされていく、という物語だ。

特に印象に残った言葉がある。

「自分が存在した世界と、存在しなかった世界。そこにあるであろう、微細な差異。そこに生まれた小さな差こそが僕が生きてきた印なのだ」

これは主人公が自分の大切なものに気づいたときの言葉だ。そこで、私も自分のことを考えてみた。もし自分がこの世界に存在しなかったら……。まず、私の弟は一人っ子になる、部活でやっていたポジションは誰がやるのだろうか。今の私が使っている部屋はどんな部屋になっているのか。涼葉が好きだからと毎年おばあちゃんが届けてくれるメロンは届かなくなってしまうのだろうか。それは弟の好きな桃に変わっていたのかもしれない。いや、ぶどうかも。こうして

私一人がいなくて様々な変化が生まれてくる。これが私の生きた印なのだ、弟がいて、部活はソフトボール部で、メロンが好き。これが「私」なのだ。

この本を読んで、私は「自分らしさ」を学んだ。ソフトボール部に所属していた私はバッティングも守備もキャッチボールも人並みにできた。でも、これといって得意なものなかった。守備が苦手でも力強いバッティングができる子、遠くには飛ばせないけど正確なスローイングで守備に貢献できる子、ここぞというときにバントを決めきれぬ技術力の高い子、みんなにはそれぞれ得意分野がある。私はせめて少し苦手だったボールのコントロールを高めようと思つて努力をした。けれど、やっぱり思つたように投げられない。試合でもたまに暴投してしまう。フォームを変え続ける。先輩のフォームを真似してみる。それでもだめ。また元通りの自分。どれだけ頑張っても変わらない。この時の私はソフトが嫌いになっていくかもしれない。そして自分自身も。得意なことがない、少しでもそのまた上がある。苦手なことも克服できない。嫌なことばかりだった。そんなとき、友達が私にこう言った。

「涼葉は足速いじゃん。ランナーに出ちやえば盗塁できちゃうじゃん。」

私は苦手なことばかりに目を向けて、自分で自分を傷つけていた。自分で自分を押し殺していた。でも、この言葉を聞いて、苦手なものを克服することもいいけど、得意を伸ばす、つまり自分の武器、「自分らしさ」を見つけることも大切だと気づかされた。そこから私はランナーに出ると続々と盗塁を成功させ、チームの勝利に貢献した。私は部活を通して、自分らしさを見つけられたことでまたソフトを楽しいと思うことができた。

「自分らしさ」を作るのは自分だけではない。私は友達の言葉によつて自分らしさに気づくことができた。人とのつながりの大切さにも気づかされた。私の周りにいる人が一人でも欠けていたら、今

のこの状況が変わっていたのかもしれない。よくよく考えてみると、友達に好きなものを紹介されたり、いっしょにスポーツを楽しんだりするうちに自分も好きだと感じた。人とのつながりの中で自分の中で新しい発見がある。人とのつながりが自分という存在をさらに作っていくのだ。そう考えると人とのつながりはついつい当たり前のように思ってしまうけれど、「小さな奇跡」なんだなと思った。その小さな奇跡が積み重なって今の私がいる。そして、ここから私はこの小さな奇跡をもっともつと積み重ねていく。それがたとえ悪いものだとして積み重ねていく。その積み重ねの中で大切にしていることと思うものがある。それは「自分らしさ」だ。「自分らしさ」を失わなければ、この先ずつと胸を張って生きていける。振り返ったとき「これでよかったんだ」と思い前へ進んでいける。自分らしく生きていける。